

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（二） -初編その2-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20546

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻(二) — 初編その2 —

神田 正行

凡例(抜粹)

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名(小字双行の場合が多いが、稀に傍訓もある)は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の言葉書きは同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本(〈133056。改装本)である。虫損や着色、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。

(四)

◆義経の雌伏

こ、に又、源 牛若丸【韓信】は、もとの左馬頭義朝の九男也。往ぬる平治の逆乱に、父義朝の討たれし頃は、なほ襤褸じつぎの内にあり。母の常盤とこはの故をもて、危うき命を助けられ、六ツ七ツの頃よりして、鞍馬寺の稚児ちごとなりて、はや年頃を経たれども、ひたすら武芸に心がけて、法師になるべき望みなければ、やうやく師の坊に疎



(16) オ おやわ婆、義経の世話を焼く

まれて、後ろめたき事のみ多かり。

これにより牛若は、鞍馬寺を逐電ちくでんして、しばしが程の隠れ家に、父義朝の馬の口取りなりし、四屋の丸太郎【▼「四谷丸太」を効かせた名前】といふ下郎、近江おうみの堅田の浦に侘び住まひして、漁うしりを、生業なりゆきにしつゝ、ありければ、彼が宿所に身を寄せけり。時に牛若十六才、これよりして源九郎、義経とぞ名乗りける。しかれども、人に知られんことを恥ぢてや、義朝の子なる由は、深く包みてありければ、丸太郎夫婦の他に、知る者絶えてなかりけり。

されば件くだんのあるじ夫婦は、はじめの程こそ義経を、故主こしゆの忘れ形見なりとて、いとまめやかにもてなしもしたれ、義経の志こころざしの匹夫下郎の、知るべきにあらざれば、

つね(義経)「それは千万せんばんかたじけな辱いい。そんなら又遠慮えんりょなしに、御馳走ごちそうになりませうか。

や(おやわ)「いつもの通り何なんにもないぞへ。おつけでもかえて上がりませ。

我が生業なまはひの助けなどに、なる由もなきをもて、いおせき者に思ひけり。

されば又義経は、日ごとに出でて宿所にをらず、三度の飯いひも時に遅れて、帰り来る事常つねなりしに、ある日主あるじの女房は、昼の炊かしきを早くしつ、己おのれら夫婦のみ食たうべて、義経のや、帰り来ても、得知らぬ顔して膳を進めず。既にしてかゝること、二度三度に及びしかば、

◆左の上より

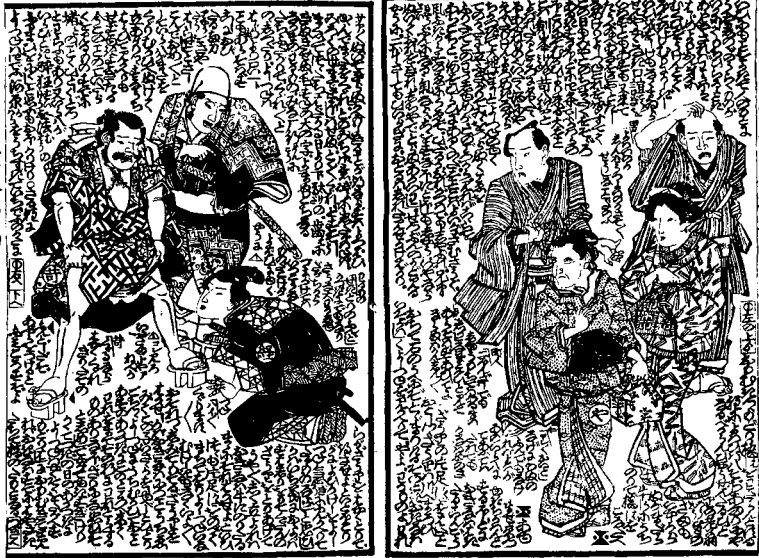
義経はその機を察して、つひに又宿所

に帰らず、更に都に旅寝して、鴨川の辺ほとりに居り。その辺りなる寡婦やもめば婆に、綿摘わたつみのおやわ【漂母】といふ者、義経のいといたう、落ちぶれたるを憐れみて、呼び入れては朝夕あさの飯いひを、懇ろに進めけり。義経これを喜びて、「お婆ばは情けある人也。我もし後に用ひられて、志を得る事あらば、今恵まる、一椀を、百万倍にして返すべし」と、言ふをおやわはあざ笑ひて、「御身は何処いづこの若殿わかとのの、落ちぶれたるにや知らず侍れど、齡よほひは十五をはや過こして、きとせし男一匹なるに、三度の次つぎへ(16ウ)／飯いひにも事を欠きて、人の許もとに飢へを凌ぐ、のうらく者がいかに

して、用ひらるゝ時あらんや。されば妾は初めより、御身に報ひを受けんとて、細き煙に炊いひぎし飯いひを、惜しげもなく参らせんや。益やくなき口誼くちを言はずとも、明日あすも又来て食たうべ給へ。あなをかしや」と窘めけり。

◆義経、苛八の股をくぐる

義経これを聞捨てて、この日も都の巷ちまた々々を、そゞろ歩きする程に、四し条河原の辺ほとりにて、向かひより来る大男は、劍けん峯のみ苛八【悪棍。▼「けんのみ」(荒々しくて邪険なさま)を効かせた名前】と呼ばれたる、所に名たる溢あふれ者也。いたく酒にや酔えふたりけん、よろめきながら近付きて、大地狭しと義経の、行く手の方に立塞かたがりて、耳を貫く声を振り立て、「この若衆わかしゆめが、この頃から見ればこゝらをあちこちと、何を拾ひらひに歩くのだ。男はよいが、寒さうで、風吹き鳥かすの餌えに飢あえて、ひだるか、俺おれが唾つばでもしやぶれ。兄弟分になる気なら、こゝを素直に通しもしやう。嫌なら抜いて俺を斬れ。質屋で取らぬ赤鯛あか鯛【▼錆び刀】、節分の門かど見るやうに、二本さしても終ひいに、劣るは知れた見せかけばかり。サア／＼抜いて



(16ウ・17オ 義経、苛八の股をくぐる)

斬らぬかへ。もし斬ることが得ならずは、よつ這ひ屈んで股を潜れ。どの道御意に従はねば、弥勒の世まで通しはせぬ。疾く潜れ」と裾引まくつて、つ、立ちは

男「弱いのか、辛抱強いのか、さて、笑止な事だのふ。

や(おやわ)「ヤレ、おいとしなげに、犬の糞でも

なければよいが。あの苛八に出会ふては、誰でも敵はぬのさ。

町人「二本差しても主持ちではあるまい。しかし生酔

ひと見て争はず、相手にならぬは感心々々。

▼「韓信」を効かせていよう。

悪者「関取の禪、担ぎにでも、なりさうな大若衆だが、

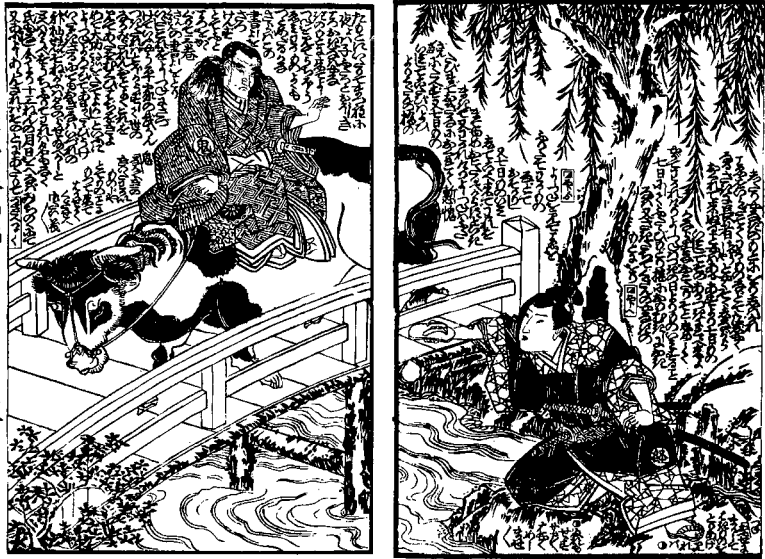
力づくにかけては一向なものだ。こけが夜這ひに行きやうに、△／△コレ見る、い、さまじやアね

へか。

経(義経)「ハイ、潜りますよ。

苛(苛八)「潜るなら早く潜れ。切りたての▲／▲禪

だぞ、油を付けると踏み殺すぞよ。



(17ウ・18オ 義経、鬼一の草履を拾う)

だかる日和下駄の、齒に衣着せぬ毛牒の大的字、読まぬ
 どちらなる仲間の悪者、みな雁行に立ち塞がりて、「潜れ
 く」と罵つたり。

義経は初めより、只一言も争はず、腰に帯びたる両刀
 を、鞘走らせせと差し込んで、おめくとして苛八が、
 股を潜り向かひへ抜けて、立上がりつ、砂うち払ひて、
 見返りもせず行き過ぎたる、今この事の為、体を、見る
 者既に堵の如く、等しくどつと笑ふもあり、又苛八がい
 ら酷き、酔狂無法の振る舞ひを、憎しと思ふも多かりけ
 り。

◆鬼一法眼、義経を試す

○さる程に義経は、四条河原をうち過ぎて、一条の方に
 ○右へ下へ / ○左の上より 赴きつ、戻り橋を、渡

経(義経)「仰せに任して履き物を、取り上げ見れば
 ●／●濡れもせず。サアく早く、召しませく。
 鬼(鬼一)「中々気の利いた若い者じゃ。とてももの事
 に持つて来て、履かせて下せへ、御大義々々々。

らんとする程に、よはひ 齢は八十余りにやなるべからん、飄然ひやうぜんたる一人の老翁らうちゆう、身のさまも賤しからぬが、まだら牛にうち乗りて、橋をこなたへ▼▲歩ませ来つ、行き違はんとする程に、翁は履きたる金剛草履の、片足をはたと落としつ、草履は川へ転び落ちて、石の上にぞ止まりける。その時翁は忙はしく、義経を見返りて、「やよ、若者よ、我らが草履を早く取りて、得させよ」と、いと誇り顔に呼びかけしを、義経急に見返りて、「たゞ者ならじ」と思ひしかば、一義に及ばず走り下りて、件の草履を取り上げて、恭しく立寄れば、翁は牛に乗りたるまゝに、「それ履かせよ」と言ひつゝも、片足を延べて待ちてをり。義経辞む気色もなく、いよ／＼恐れ謹みて、持てる草履を履かせしかば、翁はにつことうち笑みて、「この子いさ、か教ゆべし」と独りごちつ、義経にうち向かひて、「おこと明日の暁に、この所へ来て我を待て。その折に我取らす物あり。等閑にな思ひそ」と、示してやがて行き過ぎけり。

かくて次の日の暁に、義経は約束を違へず、戻り橋に

赴きて、と見れば翁は既にはや、先立ちて橋のたもとなる、次へ(16ウ・17オ) / しだり柳のもとにをり、囁れ声を苛立てて、「若者などて懦弱なる。先に長者と約束しながら、遅れて来ぬる事やはある。明日より七日物忌みして、その暁にこゝへ来よ。必ずな怠りそ」と、示してやがて別れけり。

義経は次の日より、物忌みする事七日にして、再び戻り橋に赴きしに、翁は又先立ちて、件の柳の下にをり、□印へ □印より 義経を見て声を振り立て、「若者何どて遅かりし。又七日物忌みして、こゝへ来て我を待て。努怠るべからず」と、息巻きて又別れけり。

義経は二度まで、翁に遅れて慙愧に堪へず、又七日物忌みして、此度は宵より件の橋の、たもとに至りて待つ程に、夜は子二つと思しき頃、翁は柳の下に来て、義経を見てうちほう笑み、「若者よくも努めたるかな。さらばこの書を授けんず」とて、懐をかゝりて、三巻の書を取り出だし、これを義経に授けて言ふやう、「平家の武運尽きたれば、遠からずして世の中乱れん。おこと

よくこれを見て、仇を報ひ恥を清めて、大功を立てよかし」と、言ふに義経喜びて、数多度受けいたゞき、「さるにても、翁はいづれの神仙ぞ。願ふは名乗らせ給へかし」と、問へば頭をうち振りて、「我は名もなく氏もなし。今より十三年の月日を経なば、陸奥にて又会ふ由あらん。さればその年に当たりて、**次へ続く**(17ウ・18オ)／陸奥なる平泉に、名たゝる武士を葬る事あり。その折に地を掘りて、石の棺を見ることあらん。その棺の主は我なるぞ。忘れなせ」と説き示して、立ち別る、と見る程に、姿は消えてなかりけり。

義経奇異の思ひをなして、やがて旅宿へ帰りつゝ、秘かに件の書を見るに、これ即ち太公望が、六韜三略の兵書也。就中虎韜の編は、新説を別記して、「虎の巻」と、名付けたるもの一卷あり、又「訓閲集」と、名付けたる一卷あり。みな未曾有の珍書也。義経は早くより、弓馬劍術を自得して、敵なきに至りしかども、軍陣兵学の奥妙は、いまだ極め得ざりしに、因らずこの書を得てしより、よくその旨を發明して、大功並びなきに至れり。

果たせるかなこの時より、十三年の光陰を経て、文治の頃に、義経は陸奥にあり。時に鎮守府の將軍藤原秀衡、世を去りて平泉なる、毛越寺に葬る時、その塚穴を掘るに及びて、旧りたる石の棺出でけり。**▲右の下へ**／

▲左の上より その蓋に、「鞍馬八流兵法祖師、鬼一夜眼夜台」と彫り付けたり。こゝに至つて義経は、戻り橋なるかの仙翁を、鬼一夜眼【黃石公】也けりと、初めてこれを悟りけり。鬼一が事は異伝あり、そは後々の編に至りて、詳らかに記すべし。

◆清盛のあつち死

○これはさておき、平相国清盛入道は、関の八州を巡り果てて、既に帰洛の道の程、遠江国、池田の宿に至りし日、たちまち病に冒されて、惱乱大方ならざりけり。この故に車を止めて、にはかに仮殿を造り設け、阿波民部成良をはじめとして、宗徒の**次へ**(18ウ・19オ)／**郎党**驚き憂ひて、日夜枕辺に伺候しつゝ、看病を怠らず、醫師は医案を奉りて、補瀉の術を尽くすといへども、その験なきのみならず、病ひは大熱症にして、身の内全て



(18ウ・19オ 清盛、熱病に苦しむ)

焼くが如く、炎衣裳を焦がすに至れば、傅きの女房ら

はさら也、誰とて近付く者もなし。これにより石を畳み

て、水船を造り出だし、こゝに清盛入道を臥さしめて、

上より笕の水を流しかけて、熱気を冷まさんと欲すれど

も、水はたちどころに湯になりて、病苦はいよゝ盛ん

也。かく病み患ふ事、百日ばかりに及びて、病いさ、か

暇ある時、清盛入道は二男平 宗盛と、執権阿波民部大

夫成良、ならびに宗盛の傅き、秦木工頭長高らを、間

近く招き寄せて、苦しげなる声を震はし、「我近頃、夢

高(長高)「笕の水も湯になるとは、まことに厳しい

お熱氣じやてな。

成(成良)「お命に限りあるとも、御苦しみを除き去る、

良薬奇方がありさうなものじゃが。

い(医師)「とてもお脈はうかゞはれませぬ。直に

火傷をいたしますてや。

清(清盛)「あら苦しや耐へがたや。どうぞ仕方はな

いかいやい。

に東海の龍王と戦ひしが、いたくうち負けたりと見て、この病を受けたり。我は年頃厳島なる、弁才天を信仰して、かくの如くに願ひを遂げたり。それ厳嶋の弁才天は、西海の龍神也。しかるに我が身、東海の龍王と、戦ひ負けしは命終はらん、兆にこそありつらめ。我死なば、嫡子重盛を早く熊野より、呼び迎へて家督たらしめ、汝たち我に仕へし如く、よく重盛に、仕へて忠義を尽くすべし。今も病苦に堪へざれば、この余の事は示しがたかり。汝たちよろしく談合して、計らふべし」と遺言しつゝ、忽然として息絶えけり。時に養和元年二月四日、享年六十四才也。

◆長高らの計略

成良らは、変を生ぜん事を恐れ、入道の死を深く隠して、宗徒の者にも知らせず、「熱気はおこたり給ひしかども、人にまみゆる事を、嫌ひ給ふ」と偽り唱へて、三度の膳も常の如く、日毎に病床に進めけり。

その時宗盛の傅き秦長高、秘かに成良に勧めて言ふやう、「当家の嫡男小松殿は、万に物堅くて、親をだに

非と見給へば、骨肉の間睦ましからず。しかるを今かの君をもて、平家の家督たらしめば、御身は執権の職を削られて、つひに安穩なるべからず。いかにとなれば、小松殿はかねてより、御身が勧めたるにより、熊野の浦へ追ひ遣られしと、思ふて怨み給へば也。これのみならで彼処の大將、豊後左衛門尉頼弘は、年頃御身と睦ましからず。彼は小松殿の傅きなれば、御身を害せんとこそ謀るらめ。よりに思ふに、太政官の御正印の、こゝにあるこそ幸ひなれ。入道殿下の仰と唱へて、心服の者を熊野へ遣はし、小松殿と頼弘に、死を賜はしておし片付けなば、件の祟りなかるべし。かくて宗盛公を家督に立てて、御身執権たる時は、かの君は年なほ若かり、賞罰御身の手より出でて、万思ひのまゝなるべし。早くこの義を計らひ給へ」と、肝胆を吐きて囁きけり。

成良これをうち聞て、「御辺の謀よしといへども、いかでか殿下の御遺言に、背きまつりてさるまゝな事を、行ふに忍びんや。その義はつや／＼従ひがたし」と、辞むを長高おし返して、

▲右の下へ／

▲左の上より

「時



(197・20才 長高ら、宗盛を説得)

は得がたくして失ひやすし。今我が意見につき給はずは、臍を噛むの後悔あらん。よくよく思案し給へ」と、言葉
を巧みにして説き勧めしかば、成良やうやく心動きて、
遂にその意に任しつゝ、兩人やがてうち連れだちて、宗
盛の辺りに赴き、長高が目論見の、始め終はりを具に述
べて、「家督に立ち給へ」と勧めしを、宗盛つくづくと

高(長高)「宝の山へ入りながら、手を空しくして帰
るに等しき、御後悔は遠からず。当坐の決着肝

要々々。

成(成良)「後とも言はず御返事を、お聞かせなさる
が御身の為。御合点が参りましたか。

宗(宗盛)「二人の意見に従へば、不孝不悌の恐れあり。
従はざればこの身の上。ハテ何としたらよからふ
なア。

(衝立)

有「隱匿」者 必有「冥罰」 有「奇行」者 必有「奇禍」

信西老禿題

印

(信力)

印

(西力)

うち聞て、「汝たちの謀は、我らを愛するに似たれども、親の遺言に背きまつりて、兄を害し家を奪はば、誰か人たる道といふべき。我はその義に従ひがたし」と、辞めば、成良又言ふやう、「その孝悌の御心は、いと有がたく候へども、この義は全て某ら、兩人の他に知る者なし。次へ(19ウ・20オ) / 天の与ふるを取らざれば、却つてその咎めを受くるといへり。疾く賢慮を巡らし給へ」と、言ふに長高も膝を進めて、「小松殿は兄上なれ



(20ウ 長高、守長に計略を授ける)

ども、殿下に疎まれ給ひしを、怨みて御身と睦まじからず。且頼弘も、君が愛子にましますを、年頃妬く思ふの余り、宗盛公は入れ替え子にて、傘張りの胤也なんど、言ひ振らすよしをかねて聞ぬ。か、れば小松殿の世となりて、頼弘執権たらんには、御身の上危うかるべし。とく御心を決し給へ」と、言葉巧みに勧めしかば、宗盛頻りに嘆息して、「さる事あらば是非に及ばず。汝たち兩人ともかくも、計らひてよ」と受け引きけり。

▼宗盛を傘張りの子とする伝承は、『源平盛衰記』巻四十三に見える。

こ、において長高は、成良と密談して、一通の御教書高(長高)「この御使ひを委ねん者は、御辺ならで他にはない。謀り果せて立帰らば、当主へ忠節、その身の出世。気取られぬやうに合点か。守(守長)「委細承知。飲み込みました。コリヤ大役でござりますぞへ。」

馬琴作 国安画 浄書金川

を書き認め、己が婿なる、後藤兵衛守長【閻業】を誑使として、熊野の寨へ遣はしけり。

○これより後、重盛・頼弘らが一期の事は、下帙に至りて、第五の巻に著すべし。画組みの都合によりて、いさ、かつ、事の前後するもあらん。見る人察し給へかし。

※左上 売薬広告

家伝神女湯（婦人血の道諸病の妙薬） 一包代百銅

近年薬種高直といへども、いよく薬種を選みて、功能を違はざらしむ。利の為にのみせざれば也。

精製奇応丸 「天包代式朱 中包代一匁五分」小包代五分

薬種を選み、製方を詳らかにし、分量家伝の加減をもつてす。この故に、その功百倍、神のごとし。

熊胆黒丸子（熊の胆汗を以丸。多く糊をまじへず） 一包代五分

婦人つき虫の妙薬 一包六十四銅、半包三十二銅

つき虫はさら也、産後下り物下りかぬるによし。

製薬本家（神田神明下同朋町東横丁） 滝沢氏

弘 所 元飯田町中坂下南側四方の向 滝沢氏

取次所 西国横山町二丁目売薬店 大坂屋半蔵

《巻末広告 表・裏》

○書林永壽堂新刻目録

前此編馬先生函 自正月至四月
繪本庭訓往來 二冊
文知堂先生書 後編進出板
白癡物語 全三冊
盆曲獨登告 全一冊
還魂紙料
争紙之全後集

山崎養法秘傳抄 全一冊
画本百千鳥 全三冊
新形漆彩目 全一冊
活金剛傳 全一冊

玉屑
せんぎの御業
四半手関取鏡
此書は...

《第二冊 後表紙封面》



《訂正》

本誌第四八一号(平成24年3月)に掲載した、拙稿「馬琴随筆引書索引」に誤りがありました。以下のように訂正いたします。

- ・ 6 ページ5行目
- 三巻に、に区分 ↓ 三巻に区分
- ・ 14 ページ上段 「江戸絵図」長享版、※差し替え
- 「江戸絵図」長享頃(長享の地図/長享江戸絵図)
- ・ 燕391・玄12・58・59・蔵201・237(江戸地図)
- ・ 14 ページ上段 「江戸絵図」長禄版、※差し替え
- 「江戸絵図」長禄頃(長禄の地図/長禄江戸絵図)
- ・ 燕391・玄12・58・59・蔵201・237(江戸地図)

▼広告「書林永寿堂新刻目録」(前頁下段)、奥目録「文政十二己丑新雕絵草紙」(右)。いずれも早大図書館の別本(→133057)の第四冊に拠る。奥目録に登録された馬琴合巻「代夜待白女辻占」(刊行は翌文政十三年)は、江戸風雅17・19(平成30・31年)に紹介した。

また、前回(本誌五三九号、平成31年3月)九五頁下段で「【未詳】とした「とちぼう丸」は、複数の曽我狂言に登場する「閉坊」のことと思われる。この点については、次回の「解題」で再度検討したい。

《第三冊 前表紙・同見返し》



漢楚賽擬選軍談初編之三 上下二帙
秦の徐福こくわん擬進士じよへん如福じよへんの儒士じゆせい盧生りよせいの傳でんの准下わいかの標安ひやうあ擬綿摘親輪わたつみおむわの傳でんの浅山せんざん趙三公ちよさんこう擬生博なまぢりしり物謙ものけん安衛あんゑの傳でん准陰じゆいんの惡棍わるもの某たがひ擬劍峰けんぽう苛八こはちの傳でんの黃石公わうせきこう擬鬼おに一法眼いつぱげんの傳でん涓橋けんきやうの張良ちやうりやう擬下市中げかじちゆうの韓信かんしん義経ぎけいの傳でんの呂文りよぶん伯はく擬北條時政ほつじゆうときまさの傳でんの婚席こんせきの呂婦りよふ擬時政ときまさの後妻ごけさい牧子まきこの傳でんの平ひら鱗子りんしの傳でんの婚席こんせきの焚噲はんげに擬ふに擬ふ稻毛重成いなげのちかなりの傳でんの浦うら県令けんれいに擬ふに擬ふ八牧兼隆やまきのかねたかの傳でんの蕭荷しやうが・曹參そうさんに擬ふに擬ふ広元ひろのぶ・善信ぜんしんの傳でん
重成ちゆうせい傳でん浦縣令うらけんれいに擬ふに擬ふ八牧兼隆やまきのかねたか傳でん蕭荷しやうが曹參そうさんに擬ふに擬ふ廣元ひろのぶ善信ぜんしん傳でん

曲亭馬琴著 歌川國安画 西村永壽堂梓

(表紙)

曲亭馬琴著／和漢撮合初編下帙

每篇八卷合本／歌川國安絵画

漢楚賽擬選軍談 壹

※立命館ARC蔵本

(見返し)

漢楚賽擬選軍談 初編之三 上下二帙八卷合本

秦の徐福こくわんに擬ふに擬ふ 前進士ぜんしん如福じよへんの傳でん ○儒士じゆせい盧生りよせいに擬ふに擬ふ

洛下らくがの博士はくせい盧生りよせいの傳でん ○准下わいかの標安ひやうあに擬ふに擬ふ 綿摘親輪わたつみおむわの傳でん

伝 ○浅山せんざんの趙三公ちよさんこうに擬ふに擬ふ 生博士なまぢりしり「ものしり」の誤ご

讀兵衛よむべゑの傳でん ○准陰じゆいんの惡棍わるもの某たがひに擬ふに擬ふ 劍峰けんぽう苛八こはちの傳でん

○黃石公わうせきこうに擬ふに擬ふ 鬼おに一法眼いつぱげんの傳でん ○涓橋けんきやうの張良ちやうりやうに擬ふに擬ふ

牛若丸うしわかの傳でん ○博望坡はくぼうの張良ちやうりやうに擬ふに擬ふ 斎宮次官さいみやうじくわん親良ちかよしの傳でん

○准下市中げかじちゆうの韓信かんしんに擬ふに擬ふ 源みなもと義経ぎけいの傳でん ○単父たんはの呂文りよぶん

に擬ふに擬ふ 北条時政ほつじゆうときまさの傳でん ○婚席こんせきの呂婦りよふに擬ふに擬ふ 時政ときまさの後妻ごけさい

牧子まきこの傳でん (二)扮はな、後に又呂須りよすに擬ふに擬ふ) ○婚席こんせきの呂須りよすに擬ふに擬ふ

ふ 平ひら鱗子りんしの傳でん ○婚席こんせきの焚噲はんげに擬ふに擬ふ 稻毛重成いなげのちかなりの傳でん

○浦うら県令けんれいに擬ふに擬ふ 八牧兼隆やまきのかねたかの傳でん ○蕭荷しやうが・曹參そうさんに擬ふに擬ふ

広元ひろのぶ・善信ぜんしんの傳でん
曲亭馬琴著 歌川國安画 西村永壽堂梓

(五)

◆弁慶・亀井・片岡ら、義経に臣従する

されば又義経は、都にあること既にはや、一年余りに
なりしかば、一人つらく思ふやう、「先に鞍馬寺を逐
電して、堅田の浦に足を止め、さらに都に旅寝して、な
す事もなく月日を過ぐすは、罪を師の坊に待つもの也。
しかるに今まで鞍馬より、穿鑿の沙汰もなきに、いつま
でかかくてあるべき。奥六郡の主なりける、藤原秀衡は、



(21才) 亀井・片岡ら、義経と弁慶の勝負を見守る

源氏に由縁ある者也。しばらく彼処へ身を寄せて、時の
至るを待たんのみ。さはさりながら此ざまにて、秀衡に
対面せば、恥を知らざる者に似たり。よしやかの人に身
を寄せずとも、彼処へ至らばしかるべき、世の豪傑と
友垣を結びて、助けを得る事あらん」と、思案をしつ、
只一人、旅装ひを整へて、その暁に首途しつ、心しきり
に慌た、しさにや、そゞろに時をとり誤ちて、五条の橋
を渡る頃、夜はまだ七つに過ぎざりけり。

折しもあれ一人の曲者、大薙刀を脇挟みて、橋の直中
にたゞすみたるが、今義経の来つるを見て、薙刀を取り
直し、走り進みてかけんとす。義経すかさず身を駈して、
早く左手へ避けんとするを、なほ追ひ詰めんと競ひか、
れど、義経騒ぐ気色もなく、彼方此方へ飛びめぐる、疾
きことさながら

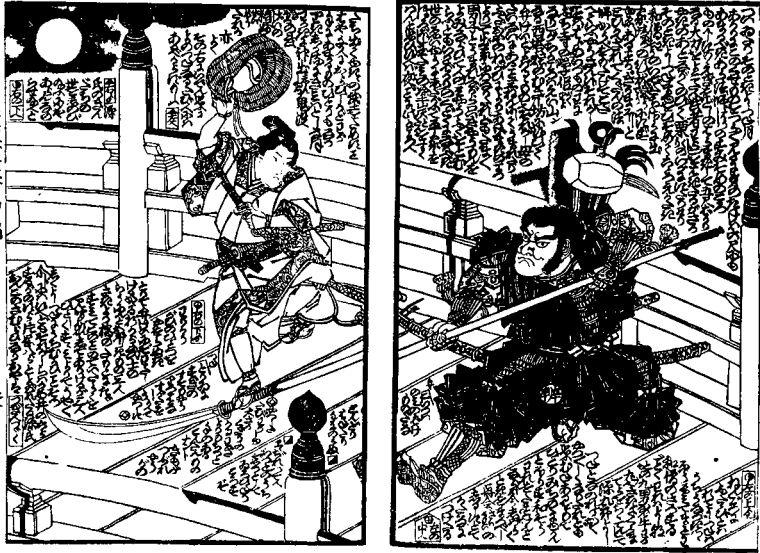
○右の下へ／＼左の上より

飛鳥の如

片(片岡)「ハテ目覚ましい武芸早技。

亀(亀井)「八幡太郎も及ぶまい。人間技とは見えぬ

く。



(21ウ・22オ 義経、五条橋上で弁慶と争ふ)

く、あるひは軽く身を躍らして、欄干の上に止まり、あ

るひは競ふてこむ薙刀の、峰にひらりと飛びのほりて、

斬らんとすれども斬ること得ならず、捕らんとすれども

稲妻の、眼にきらめくに似たりける、千変万化の早技に、

曲者は且驚き、且感服して薙刀を、からりと捨てて跪き、

「少年無礼を許し給へ。それがし夜なく、此橋にたゞ

すみて、人の武芸を試し見たるに、いまだ御身の如きを見

ず。名乗らせ給へ」と額づきて、又他事もなく次へ

(21オ) / ついゐたり。その時義経月明かりに、この曲

者を熟々見るに、身の丈六尺にも、余るべき荒法師の、

弁(弁慶)「こいつは蚤の化け物だな。飛んだり跳ね

たり手に乗らぬ。■ / ■エ、おれつてへ、ちつと

の内、じつとしてゐる、拵り殺すぞ。

経(義経)「鳥居に杉の裾模様。立派な姿を引かへて、

簀しに○ / ○簀した旅若衆。大坂下りの軽業より、

もちつと手のある魂胆者。ナント肝が潰れやうが

の。

墨染めの衣の下に、萌葱緘の腹巻きして、五尺ばかりなる大刀を横たへ、武者草鞋を履きたるが、月代の跡長く伸びて、栗のいがに似たりけり。

その時義経眉を擧めて、「心得がたき和僧のいでたち、さらに出家の行状に似ず。故ある事か、聞かまほし」と、問ひ返されて件の法師、頭を擡げて答へて言ふやう、「さん候、それがし事は、はじめ出雲の、鰐淵寺の学侶なりしが、近頃叡山なる西塔の、武蔵坊に候ひて、弁慶と呼ばる、者也。それがし母の胎内にあること、三年にして生まれたり。二親の願ひにより、総角の頃よりして、出家にはなりたれども、偶々男子と生まれながら、只経文を読み習ひて、人の冥福をとむらふとも、いかばかりの功德になるべき。世の英雄に従ふて、平家を滅ぼし国民の、塗炭を救はんと思ひ候へば、夜ごとくに此所へ立ち出て、行来の武士を試すこと、はや千人に及びしかど、我が手に余る者、一人もなかりき。しかるに君は年なほ若きに、神出鬼没の武芸の精妙、誰か亦、よくその右に出でん。思ふに世の常なる、旅人にはあるべからず。も

しは **▲左へ** / **▲右より** 源氏の公達の、世を忍び給ふにやあらん。名乗らせ給へ」と **○右の下へ** / **○左の上より** 懇ろに、再び問はれて義経は、うち領きつ、ほうゑみて、「まことわ、**▼**「に」の誤」和僧の察する如く、我は義朝の九男牛若丸也。先に鞍馬寺を逐電して、源九郎義経と名乗れり。かく窶々しくなりたれども、思ふ旨あるをもて、一人陸奥に行かんと欲す。和僧我を助けんとならば、今しばらく時を待つべし。再会の印に」とて、刀に付けたる **○左の中へ** / **○右の下より** 割り筭の、一つをやをら抜き取りて、弁慶にぞ渡しける。

かゝる折から、武士の浪人と思しき者三人、先より橋のたもとにたゞすみて、この事の為体を、見聞してありけるが、三人等しく進み寄りて、恭しく義経にうち向かひ、「事率爾には候へども、それがしらは龜井六郎、駿河次郎、片岡八郎と呼ばれたる、源氏恩顧の侍なり。親は **次へ続く** / 中宮進朝長主に従ひて、平治の乱れに討たれ候ひき。それがしらは、源氏の余類で候へば、身を立つるよすがもあらず。平家の大将一人也とも、狙ひ

討たんと示し合はせて、都に近き隠れ家に、月日を送り候へども、いまだその便りを得ず。しかるに清盛入道は、関の東を巡行すと、世の風聞に隠れなければ、便宜の所に下待ちして、その帰るさを狙ひ討たんと、思ひ起こしつうち連れ立ちて、今日首途の折に、凶らず君に見参り奉る、喜び何事かこれに増すべき。願ふは君に従ひ奉りて、共に大義を図るべし。この義を許させ給へかし」と、言葉等しく述べにければ、義経も亦喜びて、「和殿ら源氏の旧恩を忘れずして、我を助けんと言はる、事、ゆくりなき幸ひ也。しかれども、平家の武運いまだ尽きねば、軽々しく事を起こしがたし。我世に出づる日もあらば、その折に再会し給へ。今清盛を討たんとせば、毛を吹きて傷を求むる也。その義は思ひ止まるべし。再会の日の印に」とて、腰に着けたる四重の印籠の、その一重を残し止めて、三重を三人に、分かちてこれを取らするにぞ、亀井・片岡・駿河次郎は、喜ぶこと大方ならず、弁慶にも名乗り合ふて、無二の契りを結びつ、なほ「陸奥へ従ひ行かん」と、皆々等しく望みしかども、義経決して

これを許さず、「なまじいに供人ありては、世を忍ぶに便りよからず。後日の対面を待たれよかし」と、辞むに皆々力及ばず、弁慶は貯への金、一包み取り出だして、義経の路用に参らせ、「我がいでたちの目に立てば」とて、此所にて立別れ、亀井・片岡らは、ひたすらに別れを惜しみて、その夜の宿まで送り来つ、一夜さ語り明かすにぞ、義経は此所にて、亀井六郎に、我が額髪を剃り落とさせて、まことの男になりすまし、その明けの朝袂を分かちて、一人陸奥へぞ赴きける。

◆義経、越後に至る

○さる程に義経は、日に歩み夜に宿り、ゆきく／＼越後なる、片田舎を過ぎる程に、日ははや西に沈みにければ、里の草の屋に宿を求めて、こゝに一夜を明かすにぞ、主の男は年若けれども、無下の田舎人にもあらず、その立ち振る舞ひ何となく、卑しからず見えしかば、義経心に訝りて、その素性を尋ぬるに、はじめの程は言はざりしを、なほ押し返して問はんとて、「我は奥の秀衡に由縁ある者也。もし仕官の望みあらば、手引きして参らすべ

し。さのみは包み給ふな」と、まめやかにこしらゆれば、
 主あるじの心やうやく解けて、「さては御身も源氏方に、由縁ゆかり
 ある人をはするか。それがし事は源氏の残党、江田の源
 三弘基ひろもとと呼ばれし者也。親は義朝朝臣よしともあそんに從ふて、平治の
 戦ひに討ち死にしけり。それがしその頃あけまき総角なりしが、
 母と共に、此所このころに落ち留まり、見らる、如く寔々まことまことしく、
 世を渡り候へども、今にもあれ源氏の ▲右の下へ ▲
 左の上より 大将の、興り給ふ事あらば、馳せ参らんと
 思ふのみ。これを見て今言ふ由の、偽りならぬを察し給
 へ」と、言ひつゝ、かたへの壁に架けたる、大きな竹の
 筒を取り下ろし、その合はせ目を押し開けば、内より
 白鞘しらまやの刀現れ出でけり。 ■左へ ■右より 抜き放ち
 てこれを見するに、刃やいばは氷の如くにて、一点の錆もあら
 ず。義経しきりに感嘆して、その身の素性すせうを告げ知らせ、
 「和殿我を捨てじとならば、なほしばらく時を待ちね。
 我が世に出づることあらば、速やかに来て年頃の、志を
 遂げ給へ」と、言はれて喜ぶ ○中へ ○下より 源三
 弘基、一義に及ばず受け引て、なほ方寸を述ぶる折から、

梁うづぼりの上に人ありて、「ア、奇なるかな、縁なるかな」と、
 言ふに驚く義経・弘基、「あれはいかに」 次へ (22ウ・
 23オ) ／ とばかりに、等しくきつと見上げたる、梁の上
 よりどつさり、飛び下り来つる大男、銅金造りの長
 脇差わきざしに、黒衣くろこぎのいでたち厳めしき、姿に似気なく恭し
 く、囲炉裏のほとりに跪ひざまづきて、「殿ばら怪しみ給ふ事な
 かれ。それがしも亦源氏の残党、伊勢いせ三郎義盛と呼ばれ
 し者也。身のたつきなきまゝに、北国に落ち下りて、山
 客やまかとなりて年頃を経たり。しかるに先にこの所へ、泊ま
 り給ひし旅人を、源氏の御曹司とは夢にも知らず、今宵
 路用を奪はん為に、後あとをつけ忍び入て、思はず聞たる
 主客しゆかくの問答、恥づるにもなほ余りあり。願はくは陸奥むちのくま
 で、御供おんに召され下されよ」と、言ふに義経喜びて、「さ
 ては和殿も源三に、等しき源氏の余類なりしか。 ○右
 の中へ ○左の上より 大丈夫たらんもの、いかでか切
 り取り強盜をして、後に悪名あくめうを残さんや。行ひを改めて、
 後日ごにちの再会を待ち給へ。なほ世を忍ぶ我なるに、供人は
 路次ろぢの妨げ也。この義を心得給へかし」と、論すに義盛



(22ウ・23オ 伊勢三郎、義経と対面する)

せん術もなく、此夜はこゝに留まりて、主江田源三にも、志を告げ契りを結びて、二なき友とぞなりにける。

かくてその夜も明けにければ、義経は別れを告げて、立出でんとしてけるを、源三はしきりに止めて、いと懇ろにもてなしけり。こゝに至りて義経は、源三が母にも対面して、伊勢三郎もろ共に、両三日を過ぐすものから、さてあるべきにあらざれば、立別れんとせし朝、源三と伊勢三郎に、路用の半ばを分かち与へて、親を養ひ、身を保つたつきとす。兩人深くこれを感じて、左右なく

せ(伊勢三郎)「おりやしんまいの泥棒さ。言はねばならぬ話は色々。○／○ドリヤまづ坐どつてぶちまけやうか。

つね(義経)「さては和主は梁上の、●／●君子であつたか。話す気なら、囲炉裏の□／□縁へ寄らぬかへ。

源(源三弘基)「貸しい家へ立派な盗人。下に着込んだ蒲無垢を、貸しに来たのか、どうぞいの。

は受けざりしを、義経はなほ言葉を尽くして、説き諭して已まざりければ、兩人遂に辞むに由なく、やうやくにして受けにけり。この時主源三が母は、老病すでに身に迫りて、うち臥してをりしかば、今さらに義経を、国境まで送る事得ならず、伊勢三郎たち代はりて、越後と陸奥の境まで、義経を送りけり。

◆重盛、陥れられる

○これはさておき、後藤兵衛守長は、秦長高が密義に境ひ、数多の組み子を従へつ、熊野の寨へ赴きて、清盛の嫡子小松重盛【扶蘇】、寨の大将豊後左衛門頼弘【蒙恬】に、清盛の偽命を伝へて、かの御教書を渡しけり。その時重盛は、頼弘ともろ共に、父の下し文を開き見るに、その文言に、

不孝の嫡男重盛、

並びに逆臣頼弘らに死を賜ふ事
右件の重盛は、常に親の過ちを咎めて、賢ぶるのみならず、親を害せんと謀る由、その聞こえあり。こゝをもて頼弘も、亦重盛に

■印へ

■印より

荷担して、

近きに都へ、攻め上らんと欲する事、風聞既に定か也。よりて使節を賜ふて、兩人共に切腹せしむるもの也。

年月日

▼原作でも、ここに漢文の偽詔が挿入される。

と書れたり。思ひがけなき事なれば、重盛も頼弘も、「こはそもいかに」とばかりに、驚き呆れて

▲左の中より

わく由もなく、しばし応へもせざりしが、

▲右の下へ

重盛はや、胸を静めて、守長にうち向かひ、「われ此年頃苟且にも、親を疎かにせざれども、讒者の舌にかけられて、御疑ひを蒙る上は、速やかに自滅して、子たるの道を尽くすべし」と、言ひつゝ、たゞ立んとし給ふを、頼弘急におし止めて、「その御覚悟はさる事ながら、僅かに一枚の御書をもて、千金の御身を軽々しく、逸りて失ひ給はん事は、いと勿体なく候也。忍びて都へ上らせ給ひて、只幾度も御過ちの、なき由を聞え上げ給へ」と、言葉忙しく諫むるを、重盛受け引く気色もなく、「愚かな頼弘。今更に命を惜しみて、遥々都へ上るとも、いよく父の御疑ひを、増すのみにしてその詮あらんや。



(23ウ・24オ 重盛・頼弘、死を賜つ)

既に覚悟を極めたり、我死なば世の中乱れて、平家はそこに滅びなん。是非もなき次へ(23ウ・24オ) / 身の果てにこそ」と、嘆息しつゝ、荒やかに、袂を丁と振り切つて、持仏堂に引こもり、早くも自害し給ひけり。頼弘いよいよち嘆きて、「十万の兵こゝにあり。守長を討ち殺して、謀反を起こすは易けれども、我は平家譜代の侍、受けたる恩の重かるに、今更主に叛くに忍びず。是まで也」と双肌脱ぎて、腹十文字にかき切りつゝ、うつ伏しになりて死にけり。

守(守長)「切腹確かに見届けた。大臣様にもお覚悟あれ。役目なれば気の毒ながら、ちとも用捨はいたしませぬぞ。

弘(頼弘)「身に覚えなき謀反の咎、命はかねて我が君へ、奉らんと思ひしも、甲斐なき犬死にかくの如し。御上使御披露頼み申すぞ。

重(重盛)「非道と思へど親の命。我も最期の用意せん。しばらく控へよ兵衛守長。



(24ウ・25オ 守長、重盛の神靈を見る)



さる程に守長は、事十二分に謀り果せて、いと喜ばしく思へども、「年頃重盛・頼弘の、恩義を思ふ兵らが、謀叛を起こす事あらば、そは由々しき大事ならん。おし片付けん」と思案をしつ、欺きて十万の、兵を揃め捕つて、皆悉く頭を刎ね、年老いたる雑兵千人ばかりと、重盛に仕へたる、青女房らを残し置きて、熊野の浦の寨を守らせ、その身は組み子に重盛と、頼弘の首桶を携へさせ、東路さして急ぐ程に、行く事いまだ幾何ならず、岩田川のほとりまで至る時、その一つの首桶の、にはか

雑兵「あれは確かに幽印。ぞつとして来た身柱元」

首筋。寒いは川風、柳の木蔭。

雑兵「確かに見たか、夜鷹なら、そ、らふものを、嫌やの〜。

守(守長)「開けて悔しき浦島の、玉手箱にはあらねども、亡き魂に空しき首桶。それかあらぬか□
 /□何にもせよ、怪しきこの場のあり様じやよなア。

に軽くなりしとて、組み子らが罵り騒ぐを、守長聞て甚だ訝り、やがて二つの首桶を、押し開きつ、改め見るに、頼弘の首はあり、只重盛の首級はなし。「是はいかに」とばかりに、慌ててあたりを見返れば、怪しむべし重盛の、ありつる姿朦朧と、川のほとりに現れたり。着たる浄衣も異にして、鈍色に見えたるが、あれよくといふ程に、煙の如く消え△／＼△失せけり。

▼重盛の死については、随筆『玄同放言』第二集(文政三年、仙鶴堂刊)「第三十五人事 小松内大臣」に考証がある。

守長いよく疑ひ迷ふて、熊野の寨に引返し、かの傳きの女房らに、事の由を説き示して、重盛の自害せられし、その為体を尋ね問ふに、女房たち皆言ふやう、「大臣様のおん自害し給ひし事はなし。御父殿下の道ならぬ、御行ひを

■右の下へ／＼■左の上より 嘆かせ給ひて、熊野の神に祈りつ、「早く死なん」と願ひ給ひし、その験にや先の程、御身が上使として来給ひし、その折頓死し給ひけり。しかる折から寨の騒動、頼弘主にも云々

と、告ぐる暇のなかりしに、頼弘主も

●左へ／＼●右よ

り 腹かき切つて、忽ちに失せ給ひ、十万人の兵も、残り少なに討たれしかば、大臣様の御亡骸を、私に葬らば、後の崇りの恐ろしさに、今なほそのまゝ置き奉りぬ。疑はしくは見給へかし」と、言ふに守長ますく呆れて、時を移さず重盛の、亡骸を改め見るに、身に露ばかりも傷はなし、全く病死と見えしかば、「さては先に某に、対面ありしは亡魂ならん。今さら思ひ合はずれば、その折大臣のおん身の内より、灯笼の如き光り物、出でて次へ(24ウ・25オ)／＼西の方へ飛び去りしが、それは亡き魂の印ならん。さてもく」とばかりに、呆る、事半刻ばかり、さすがにもの、恐ろしさに、重盛の亡骸を、辺りの寺へ葬りて、遂に遠江なる、池田の飯館へ帰り来つ、即ちありし為体を、長高に告げ知らせて、頼弘の首級を渡しけり。

◆宗盛、遊興に耽る

こ、に至つて長高は、成良【李斯】と密談して、宗盛ともる共に、清盛の亡骸を、生けるが如く車に乗せて、

急ぎて都へ歸しつゝ、六波羅の館へ傳き入れて、初めて清盛の逝去の由を、残る隈なく触れ知らせて、福原の菩提所へ、葬りの式を執り行ひ、やがて宗盛を家督と定めて、大臣に拝任せらる。成良・長高両執権として、勢ひ肩を並ぶる者なし。

○かくて又長高は、宗盛に説き勸めて、平家宗徒の一族なる、知盛・教経・忠度など、世に文武の、聞こえある大將をば、みな西海の守りにとて、筑紫の果てへこれを遣はし、日夜長高・守長のみ、主のほとりに扈從して、

▲右の下へ

▲左の上より

酒宴遊興をのみ勧めしか

ば、宗盛これをよき事として、成良らの執権に対面を許さず、先に池田の宿より携へ歸りし、熊野といふ美女にうつゝを抜かして、舞ひ囃させて余念なし。あまつさへ父入道の時、いまだ工を終はらざりし、福原の別殿を、造り果たさんとて、国々に夫役を起こして、民を虐げ使ふ事大方ならねば、人皆恨み憤りて、盜賊処々に起こり、奸民これにうち混じりて、乱暴限りなかりしかば、

▼熊野は『平家物語』長門本などに登場する遊女。謡曲「熊野」で名高い。

六へ続く (25ウ)



(25ウ・26オ 成良、宗盛に諫言せんとする)

(六)

五の続き 訴へ櫛の齒を引くが如く、事六波羅に聞ゆれども、長高【趙高】これを押し隠して、宗盛【扶蘇】に告げ知らせず。この故に宗盛は、「四海いよく太平なるに、今この時に樂しますは、いづれの時を待つべきや」とて、国の政まことには心をもち用ひず、ある時は福原なる、

面白の春の景色や。あら面白の春の景色やな。

▼謡曲「東岸居士」に、この文句が見える。また謡曲

「熊野」には、「名に負ふ春の景色かな」という詞章の繰り返しがある。

成(成良)「昼夜を分かぬ御遊興、○／○我が君様、申上たき一義あり。成良御前へ罷り出ました。

ゆ(熊野)「あんまり酒が過ぎませう。ちとお慎み遊ばしませ。

宗(宗盛)「あの親父めで酔ひも興も、□／□醒め果てて真面目になつた。サア又是から飲み直さうく。

別殿に赴きて、遊興に日を重ぬる事多かり。

一人阿波の民部成良【李斯】のみ、これらの事を深く憂ひて、諫めばやと思へども、久しく対面を許されねば、主に近付く事を得ず。余りの事に思ひかねて、秘かに秦長高に、云々と、意中を告げて談合せしを、長高聞て眉を顰め、「某もその事を、思はざるにあらねども、この年頃殊更に、親しく使はれ奉れば、某などが申す由は、聞こし召し入られず。よからん折を見計らひて、秘かに知らせ申さんに、諫め参らせ給へかし」と、言ふに成良喜びて、「しからは御（人）辺を頼むのみ。よろしく計らひ給ひね」と、約束しつゝ、別れけり。

かくて秦長高は、宗盛のいとゞしく、酒宴に耽り乱酔して、もの、文目も分かたぬ折に、成良許使ひを遣はして、「かねて御頼みの潮合は、只今しかるべき折也。疾く御前へ出でさせ給へ」と、まことしやかに

右の下へ／＼左の上より 言はせにければ、成良は忙はしく、主の辺に赴きて、見れば舞ひ姫らが唄ひ囃す、遊興の最中なり。「ついで悪し」と思へども、今さらに引

くに引かれず、うち咳きつゝ、進み入りて、主に近付きて諫むるやう、「君は御酒宴遊興に、うつゝなくましませば、世の中の騒がしきを、いまだ

▲中へ／＼▼下より 知る

し召されずや。今国々に盜賊起りて、一日も次へ(26才)／＼安からず。領主・郡司の訴へは、絶ゆる間もなく候に、日闕けて食らひ、夜衣を着る、国の大事をよそにして、御遊興は勿体なし。今より声色を遠ざけ給ひて、偏に理世安民の、御計らひこそ肝要ならめ」と、言はせも果てず宗盛は、怒れる声を振り立て、「成良そは何をか言ふ。今世の中は無異にして、都も鄙も静かなるに、賊乱の訴へありと、申すは我を驚かして、酒宴を止めん手立てならん。我先君の箕裘を嗣ぎて、位高く家富み榮えて、靡かぬ草木もなきものを、かばかりの楽しみを、奢れりといふべからず。治まれる世を乱れたりと、申すは不忠の虚言なり。きとその罪を糺すべけれど、年頃の功に愛でて、此度は沙汰に及ばず。疾く／＼そこを退かずや」と、息巻き荒く叱り懲らして、しばしもおかず追つ立てらる。さすがに主の勢ひに、争ふべくもあら

ざれば、成良は心の内に、頼もしげなき長高の、計らひを恨むるのみ、是非なく宿所に退きて、鬱々として樂しまず、引籠りてぞゐたりける。

◆頼朝、時政の婿になる

○こ、に又、前兵衛佐頼朝【劉邦】は、往ぬる平治の兵乱に、平家の侍弥平兵衛宗清に生け捕られて、すでに誅せらるべきを、清盛の継母なりし、池の禪尼の情けによりて、危うかりし命を助けられ、すなはち伊豆へ流されて、蛭が小島の配所にあり、はや年頃を経たりける。そもく頼朝は、鼻高く頭大きくして、左の腿に七十二の黒子あり。その器量人に勝れて、小節に拘はらず、よく人と交はりて、容る、事巨海の如し。こ、をもて、志ある里人らは、友垣を結び相親しみて、断金の交はりをなさばやと、思ふ者多かり。此頃北条 四郎時政【呂文】は、同国北条の郷士也。頼朝の人となりを、かねて見る由やありけん、ある日その妻牧子に語らふやう、「我頼朝を相するに、叛逆の余類にて、当国の流人なれども、人の下風に立つ者ならず。且貴人の相あるに似たれば、

後に必ず尊かるべし。よりてわが娘政子【呂顔】をもて、娶せんと思ふ也」と、言ふを牧子は聞あへず、「先に御身は山木殿【浦巢令】に、口づから約束して、政子を嫁に参らせんと、宣ひしに侍らずや。さるを又今更に、日陰者の兵衛佐を、婿がねにし給はんと、言はる、事こそ心得ね。山木は当郡の領主にて、世に勢ひある武士なるに、そが縁談を交換えて、流人を婿にし給はゞ、禍そこら起こるべし。よくく思案を

○右の印へ

○左の上よりし給へかし」と、託言がましく諫むるを、時政聞かずうち笑ひて、「そは又御身の知る事ならず。我等に任せ給へ」とて、媒をもて云々と、頼朝に告げて、

●下へ / ●中より 婚縁を取り結ぶに、頼朝は一義に及ばず、事速やかに整ひけり。

さる程に、時政は吉日を選みて、頼朝を我が宿所に、招き寄せて娘政子と、婚姻を取り結ばせ、万世までもと寿く折から、年なほ若き一人の武士、「兵衛佐ははするか」とて、頼朝を訪ねて来にければ、時政自ら出迎へて、「御辺は誰ぞ」と名を問ふに、「某事は、源家譜



(26ウ・27オ 時政、頼朝と重成を婿に取る)

代の武士なりし、稲毛重時が一子にて、稲毛太郎重成いなげのしげとき いっし「樊

噲」と呼ばるゝ者也。兵衛佐殿とはこの年頃、殊に親

しき友にして、云々の所に住めり」と、言ふに時政領き

て、まづ重成をと見かう見つゝ、たちまち奥に走り入て、

頼朝に告げて言ふやう、「和殿の友人稲毛太郎、重成と

いふ若人が、只今和殿を訪ねて来たれり。およそその人

牧(牧子)「何事も時節とやら。皆縁づくであるけれど、

人並みならぬ主の性急、さぞをかしうござんせう

なア。

時(時政)「善は急げといふ事あれば、今日一日に二

人の婿取り。籤も占ひも入りませぬ。承知ならば

今すぐに、盃をさするぞや。

稲(稲毛)「余りの事に早急で、夢を見るやうな事。

覚めたら惜しうござりませうぞへ。

朝(頼朝)「訪ねて来られて即坐に相婿。縁談もかう

速やかに整ひますれば、仲人は大儲け。ざつと二

役済みました。

の善し悪しを ■中へ ■下より 知らんと欲せば、ま

づその友を見よと言ひけん、古人の言葉宜なるかな。今重成を熟々見しに、あはれめでたき若者也。かの人もだ妻子あらずは、政子が妹鱗子【呂須】をもて、彼に娶せんと思ふ也。和殿この義を計らひ給へ」と、言ふに頼朝喜びて、やがて稲毛を呼び入れて、時政の言ひつる由を、云々と囁き告げて、次へ(26ウ・27オ) / 「媒をせん」と言ふ。重成は今、頼朝の時政の、婿になりける由を聞つゝ、喜びて一義に及ばず、やがてその意に任せしかば、縁談たちどころに整ひけり。これにより時政は、由を妻と娘どもに告げ知らせて、この日政子の妹鱗子をもて、稲毛太郎に娶せけり。

されば北条時政は、「凶らずも今日一日に、良き婿を二人まで、取り得たり」とて誇りつゝ、喜ぶ事大方ならず、なほ両三日酒盛り遊びて、めでたしとのみ讃へけり。

◆頼朝、大蛇を斬る

○この頃都には、平大臣宗盛、いよく福原の、別殿を造り増さんとて、伊豆国より大きな石を、取り寄する

事限りなし。されば頼朝は流人なれども、時政の婿なりしかば、夫役の幸領に宛てられて、伊豆の山奥より掘り出す、大石を下田の浦まで、引出させんとする程に、その石の大きなこと、高は六丈、横も四丈に余りにければ、数千人の夫役ども、これを山より出だすこと得ならず。こゝ、かしこにうち集ひて、皆うち泣きつゝ、語らふやう、「かの福原に、別殿を建てられしよりこの方、年々夫役に暇なく、責め使はるゝ事大方ならず。剩へこの山より、かゝる大石の出でたるこそ、我々が不運なれ。よしや万人の力を合はして、引出ださんと欲するとも、嶮岨の山路をいかゞはせん。さればとて出だし得ずは、残らず頭を刎ねらるべし。さていかにせん」と、言ふより他に術もなく、只さめくと泣きにけり。

頼朝これを漏れ聞て、主立ちたる夫役らを、招き寄せて諭すやう、「あの石まことに広大なれば、各々の嘆き理也。いよく出だしがたしと思はゞ、速やかに逃げるべし。もし徒らに日を送らば、その咎めを蒙らん。疾く」と急がしけり。皆々これをうち聞て、「そは



(27ウ・28オ 頼朝、大蛇を斬る)

喜ばしき事ながら、我々こ、より逐電せば、その崇りた
ちどころに、御身一人にかゝるべし」と、言ふを頼朝聞
あへず、「否、我とてもかくてはをらず。しばらく影を
隠すべし。まづはや行きね」と諭されて、皆々その義に

人夫「あの口で吞まれてたまるものか。おいらは帰ろ、
逃げますく。

人夫「悲しや、腰が抜け、裏の空き地のやうで、た、
ねへく。

▼「腰が立たない」に「家が建たない」を利かせる。

頼(頼朝)「大蛇も恐る、劍の威徳。手並みを▲／▲

見せん、騒ぐな人々。

(左上。老婆、龍の死を嘆く)

媪「思へばはかない我が子の運命。○／○これが泣か
ずにゐられふかいのふ。

皆々「青龍だの玄武のと、俳諧師のおふくろか、へん
ちきな事を言ふばアさんだ。本気ではねへ、氣違
へさく。

従ひつゝ、掘りたる石を山に捨てて、みな散りくになりにけり。

そが中に、頼朝の徳を感じて、残り留まりし者百五十余人あり。頼朝これらを従へて、天城山に隠れんとて、山路遙かに登る程に、先へ進みし夫役ども、驚き騒ぎて告ぐるやう、「行く手の山に大蛇あり、**次へ**（27ウ・28オ）／**続き**」その身の内黒くして、鉄の柱を延べたる如く、彼方の道に横たはれり。そゝろに近付き給ふな」と、言ふを頼朝聞あへず、「人々さのみ騒ぐべからず。大蛇ありとて恐るゝとも、今更何処へ行くべきぞ。いでく道を開きて得させん。我らに**続け**」と先に進みて、腰に帯びたる髭切の、刀をもつて件の大蛇を、づたくに斬り払ひて、なほ山深く分け入りけり。

しかるにその夜一人の媼大蛇の斬られたる辺に来て、声振り立てて泣きにければ、天城山に炭を焼くとて、山籠りせし者共の、怪しみて由を問ふに、媼は泣きつゝ、答へて言ふやう、「我が子は北方玄武の神なり。しかるに東方青龍の神に斬られたり。こゝをもて悲しみに、耐へ

がたし」とぞ答へける。炭焼きはこれを聞いて、「こは必ず化け物ならん」と、思へば杖を振り上げて、一度にはたと打ちしかば、媼はたちまち煙の如く、消えて姿はなかりけり。

後に思ひ合はすれば、頼朝・義仲並び起りて、互ひに雌雄を争ひつゝ、義仲つひにうち負けて、鎌倉の世となりぬべき、前兆なりきと人皆言ひけり。げに義仲は北国に起り、頼朝は東国に旗を挙げたり。青龍・玄武の神と〇／〇いひしも、誣ひ言にはあらざるべし。

◆源三位頼政、拳兵する

○こゝに又、源三位頼政【陳勝】は、いぬる平治の**▲**右の下へ／**▲**左の上より兵乱に、義朝と引別れて、平家の方人なりければ、その身に恙なけれども、その忠節の恩賞なく、剩へ清盛に世を狭められて、あれども無きに異ならねば、無念やる方もなきものから、時至らねば術もなく、数多の年月を送る程に、清盛入道世を去りて、その子宗盛、大臣になり上り、いよく法皇を、苦しめ奉るを見聞くに堪へず、この月頃、高倉の宮に勧め奉り



(28ウ・29オ 頼政、兵を集える)

て、平家追討の綸旨を申し下し、国々の源氏へ牒じ合は

せて、平家を滅ぼさんと謀る程に、その事早く顕れて、

味方の源氏はまだ集まらず、討手の軍兵うち向かふと、

世の風聞に聞こえしかば、頼政は慌たしく、宮に俱し

奉りて、嫡子伊豆守、仲綱ともろ共に、一族郎等を引率

して、南都を指して退く程に、平家は中将重衡を、討手

の大将軍として、妹尾あなづね太郎兼安、難波なんば小次郎常久を相添

唱「頼み甲斐なき山法師らが、心変りは味方の浮沈。

■此所にて防ぎ戦ひ、もし敵はずは切り抜け

て、南都へお供仕らん、かねての覚悟でござりま

す。
丁七唱ちやうしちのうた

仲綱「小勢をもつて大敵に、当たるはもとより必死の

覚悟。各々急いで出陣々々。

仲綱

頼政「まづ宇治橋を切り落として、敵を渡さぬ手立て

が肝要。

頼政

ゆき(行吉)「水中に綱を張つて、馬の脚をかけ悩まず、

用意は

下河辺行吉

え、軍兵三万余騎をもて、頼政を追はせにければ、頼政はなまじいに、奈良まで引退くしりぞに及ばず、宮に傅かき奉りて、宇治の平等院に立て籠り、宇治橋を切り落として、しばらく防ぎ戦ひけり。

はじめ頼政が、高倉の宮に勧め申して、**次へ**(28ウ・29オ)／国々の味方を招く時、繪旨の趣に書かせられて、御即位ごそくゐの、ち功によりて、恩賞あらんといふことあり。頼政の郎等渡辺ちうどう丁七唱とくな、秘かにこの義を難じてはいはく、「繪旨は天子の賜はる所、宮家は令旨みやけたるべきものか。且御即位ごそくゐの、ち■／■云々しかくと、遊ばされしはいかにぞや。こは僭上せんじやうと申すべし。かくては此度の御企おんては、全く御身の慾より出でて、天子の位を望ませ給ふ、為のみ也と言ふ者あらん。名止しからざれば、事行はれ候はず。繪旨を令旨に書き替え給はゞ、しかるべし」と諫めけり。頼政これに心つきて、「まことにさなり」と後悔するのみ、「既にはや国々へ、持たし遣はしたりければ、それを今さら召し返して、書き改むる事なりがたし」と、応へて遂に用ひざりけり。

▼頼政が「繪旨」の形式で発布した「廻宣ノ令旨」は、「源平盛衰記」卷十三「高倉宮廻文」に掲げられる。

◆義仲、拳兵する

○さる程に、木曾冠者義仲のくわんじや【項羽】は、高倉宮の繪旨をもて、源三位頼政の、義兵を起こす事の由を、伝へ聞て
 ▲右の下へ／左の上より 深く喜び、母方の伯父権守兼遠かねとほ【項梁】と相図るに、兼遠も亦その義に同じて、まづ一族を招き寄するに、信濃国しなのには樋口次郎兼光【鍾離昧】、今井四郎兼平【周蘭】、その妹勇婦巴【季布】をはじめとして、馳せ集まる者士卒しそ雑兵、全て二三百人に及びけり。「此勢ひを抜かすな」とて、木曾の寨に立て籠りて、義兵の旗を挙げんとす。
 そもく義仲は、瞳二つ重なりて、骨逞しく筋強こほく、山を抜くの力あり。はじめ総角あけまなりし時、兼遠これに手習ひさせ、又剣術を習はするに、二つながら身に入れて、よく習ふことなかりしかば、兼遠怒りて叱り懲らせど、
 ■中へ／下より 義仲つやく／従はず、うちほう笑みて答へて言ふやう、「書は姓名を記すに足たる、剣術は



(29ウ・30オ 今井・樋口ら、義仲の陣に来たる)

一人の敵のみ。願ふは万人の敵たるべき、道を学ばんと望みしかば、兼遠これに驚き感じて、兵法軍陣の術を教ゆるに、義仲喜んで怠らず、日夜に学び励みしかば、その次へ(29ウ・30オ) / 妙奥を極めけり。しかれども義仲は、なほ若年たるにより、兼遠しばらく後見して、大将の任に当たり、義仲を副将として、手近き城を攻め取るべき、謀をぞ巡らしける。

光(兼光)「勢ひ水の決する如き、名も適ふたる樋口

兼光。

兼光

巴「巴はすなはち波の紋、女波も寄せて一手柄、褒められたさに参りましたはいなア。

巴

とほ(兼遠)「早速の着到あつばれく。後陣に入て休息せられよ。

兼遠

かね(兼平)「今日会稽の旗挙げに、休息など、は本意なき仰せ。先陣は我々三人、いざくお発ちあられませう。

兼平

義仲 ▼言葉書きなし。

◆頼朝、山木兼隆を討つて挙兵

さる程に都には、源三位頼政、高倉宮に具し奉りて、宇治の平等院に立て籠り、信濃には木曾冠者義仲、乳人親の権守、兼遠と共にこれに応じて、木曾の寨に立て籠り、猛威を近郷に振るふ由、伊豆国へ聞こえしかば、当国の領主、山木判官驚き騒ぎ立て、京家の侍大江の広元【蕭何】、三好善信【曹参】を招き集め、「逆徒東西に起これる由、今日云々の風聞あり。か、れば当国にも彼らに与



(30ウ 広元ら、兼隆に前兵衛を推挙)

する、逆賊なしとすべからず。武勇に勝れし者あらば、招き集めて籠城の、助けにせんと思ふなり。この義を心得候へ」と、言ふに兩人答ふるやう、「そは幸ひなる者こそ候へ。我々が友人に、前兵衛といふ武士の浪人あり。武芸計略人に勝れて、一人当千の若者なり。この人を招き給は、万卒に勝るべし」と、言ふに山木は喜び、「しからばその前兵衛を、招くべし」とぞ言ひ付けける。

そもく広元と善信は、頼朝と此年頃、▲下へ▲

上より親しき友でありければ、此便宜をもて彼の人に、功を立てさせんと思へども、あからさまにその名を告げなば、山木判官忌み嫌ひて、受け引くまじきよしを知れば、前兵衛佐といふべきを、略して前兵衛といひし也。よりて山木の判官は、広元・善信らが勧むる武士を、頼

よし(善信)「委細承知いたしました。

ひろ(広元)「我々兩人書状をもつて、招かば参るでござりませう。

ざりませう。

山木「それは幸ひ重畳々々。一刻も早く来ればよいが。

朝也とは知らずして、いと頼もしく思ひけり。

▼初印本と思われる、林美一氏旧蔵本の第三冊の後表紙

封面（奥目録）は、第一冊と同じ。本誌第五三九号

一〇四頁参照。

（かんだ・まさゆき 法学部准教授）